原　　著

成人看護学実習において学生が捉えた手術見学実習体験の術後看護への影響

板東孝枝[1)]，雄西智恵美[2)]，今井芳枝[1)]，髙橋亜希[1)]，近藤和也[1)]
[1)]徳島大学大学院医歯薬学研究部
[2)]甲南女子大学
（令和３年８月６日受付）（令和３年10月11日受理）

目的：成人看護学実習において，学生は手術見学実習を行った体験が術後看護にどのような影響をもたらしていると捉えているのかを明らかにする。
方法：看護系大学３年生10名に半構造化面接を行い，質的帰納的分析を行った。
結果：受け持ち患者の手術見学実習体験を通して学生は，【手術や麻酔による影響を念頭に置いた観察とアセスメント】を意識し，【実際の手術をみたことで意識した術後疼痛ケア】を実践しながら，【術後の混乱を予防し，安心を守るための患者の現状認識促進に向けた働きかけ】を行うなかで，【患者・家族の頑張りに感化される看護ケアへの責任】に対する自覚が芽生えていた。
考察：学生は手術見学実習体験を通して，術後回復促進のためのケア視点の実践的な理解や患者の頑張りに感化され，看護ケアに対する責任への刺激を受けていることが示唆された。

周術期看護の実習では，手術により心身の状態が大きく変化する患者に対して，その不安や恐怖に寄り添い，術後の早期回復を促進し，社会復帰に向けた援助方法を学習することが重要な目標となる。この目標達成のためには，患者の健康回復の要となる手術を学生の五感で学ぶことは，学生の学習動機を促進する貴重な体験になると考える。近年の手術見学実習に関する先行研究は増加傾向にあり，学生が手術見学を行うことでの学びの内容としては，合併症予防，心理的援助[1,2)]や手術室看護師の役割に対する理解[1-5)]が報告されている。また手術見学実習を経験したことで，学生の手術室に対するイメージは，緊迫したイメージから安穏なイメージに変化がみられ[6)]，周術期看護実習における手術見学実習は，学生の学習に対する動機づけの機会になり[7)]，短時間で見学のみの実習であっても，学生はケアリングの要素を学ぶことができることが明らかになっている[8)]。

しかし近年，患者の在院日数の短縮化に伴い，手術を受ける患者の術前・術後の入院期間も顕著に短縮化が進んでおり，学生が臨床実習で体験できる内容も変化している。麻酔技術の進歩や手術の低侵襲化から術後患者の回復も目を見張るほど早く，学生は常に患者に関心を寄せ，身体的・心理的変化を意識してケアを行わないと，学生が気づかないうちに患者は早々に回復し，術後経過を見逃す可能性がある。このような周術期医療の臨床現場において，学生の関心や情動の動きを捉えて学習動機を刺激する学習の要素が手術室にあると期待できる。しかしながら多くの先行研究は，課題レポート等の記録物を分析した結果[1-5,9,10)]であり，詳細な学習効果の明確化に限界がある。

そこで本研究では，手術見学実習体験がどのような学習の広がりや意味をもつものであるのか，更なる探求が必要であると考え，学生は手術見学実習体験が術後看護にどのような影響をもたらしたと捉えているのかについて明らかにすることを目的とした。

Ⅰ．研究目的

成人看護学実習において，学生は手術見学実習を行った体験が術後看護にどのような影響をもたらしていると捉えているのかを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．用語の定義

成人看護学実習：本研究では，周術期看護学実習とする。

手術見学実習：成人看護学実習において，学生が受け持ち患者とともに手術室へ入室し，外回り看護師から手術見学実習での学習の視点を示した観察項目表をもとに説明を受け，行動をともにしながら行う実習である。

手術見学実習体験：手術見学実習において，学生がみたり，聞いたり，感じたり，考えたり，対処したこととする。

影響：手術見学を体験したことによる結果であると，学生が認識した自身の認知や考え，判断，行動，態度などの変化や反応とする。

Ⅲ．研究方法

１．研究デザイン

半構造化面接法を用いた質的記述的研究デザイン

２．研究協力者

成人看護学実習で手術見学実習を行った看護系大学３年生54名のうち，本研究への同意が得られたのは10名であった。

３．成人看護学実習の目的と指導方法および手術見学実習における指導体制

１）成人看護学実習の目的と実習の進め方

本実習は，“成人期にある手術患者を統合的存在として理解し，健康問題解決のための批判的，創造的思考を養い，具体的な援助方法を習得する”ことと“看護実践を通して看護の本質を探究し，自己の看護観・倫理観・職業観を発展させること”を目的とした２単位の実習で，外科系病棟（消化器外科，乳腺・甲状腺・呼吸器外科）で実習を行っている。初日は，病棟，手術室，集学治療病棟の入室方法などのガイダンスを実施し，その後は受け持ち患者の看護過程の展開を中心に実習を進める。

２）手術見学実習における指導体制

成人看護学実習の初日に教員と手術室看護師長よりオリエンテーションを受け，受け持ち患者の手術見学実習当日は，見学項目を明示するために看護師長と教員が共同作成した観察項目表[11]を持参して入室し，観察できた事項は自己チェックする様式にしている。学生は，同じ観察項目で作成した指導者用の観察項目表を外回り看護師に手渡し指導を受けている。教員は定期的に巡回し，麻酔や手術室の状況に関する概要を説明している。なお実習は１クール（２週間）で，手術見学実習は１日（受け持ち患者の手術見学実習）である。

４．データ収集期間

2013年12月～2014年２月。

５．データ収集方法

手術見学実習を経験し，本研究への協力に同意をした学生に，作成したインタビューガイドをもとに，成人看護学実習終了後に半構造化面接を行った。インタビューガイドの内容は，「手術見学をしたことが，その後の受け持ち患者の術後看護にどのように反映されたのか」や「手術見学実習を行ったことで，受け持ち患者の術後看護に生かされたこと」などを尋ねた。インタビューは，プライバシーへの配慮のため個室で行い，１名につき１回30分程度とした。インタビューの内容は，研究協力者の同意を得た上で録音し，逐語録に起こした。

６．分析方法

データ分析は，逐語録をデータとし，①作成した逐語録を丁寧に何度も読み，文章の意味が読み取れる最小の文節を分析単位とした。②上記①で取り出した箇所の意味を損なわず，隠れた主語や目的語などを補足し内容が明瞭になるように記述した。③手術見学実習を行った学生が捉えた周術期看護ケアの視点に焦点を当て，同じ意味内容ごとに集め，可能な限り研究協力者の言葉を用いて簡潔に表現し，共通性を見出すなかで抽象度を上げ，カテゴリー化を行った。カテゴリーの類似性や相違性により，カテゴリーの関係性を探索し，分析を進めた。カテゴリーの生成は，常に学生の語りの内容を確認しながら行い，その後，看護学領域の質的研究者および周術期看護を専門とする教員のスーパーバイズを受けながら，共同研究者間で語りの要約とカテゴリーの確認・修正を行い，真実性を確保した。

７．倫理的配慮

研究協力者へ実習終了後に，研究主旨，プライバシーの保護，研究への参加の自由意思，研究への参加・内容は成績には影響しないことを文面および口頭で説明を行い，書面による同意を得た。なお本研究は，徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認後に実施した（1576）。そして研究結果が公表される場合にも個人が特定されることがないことも保障した。データの逐語録作成後のデータは，研究終了後５年の間，本研究に係わる必須文書を鍵のかかる保管庫に保存し，その後廃棄した。

Ⅳ．結果

研究への参加協力の同意が得られたのは，10名で，男

子学生１名，女子学生９名であった。見学した術式は，肺切除術５名，肝切除術３名，膵頭十二指腸切除術１名，乳房切除術１名であった。手術見学開始を点滴ライン挿入とすると，開始から手術終了まで全過程を見学できた学生が８名で，開始から見学できたものの，手術時間の延長により手術途中で退室した学生は，２名であった。なお手術見学実習中に気分不良を訴える学生はいなかった。

分析の結果，４つのカテゴリーと８個のサブカテゴリーが導き出された（表１）。カテゴリーは【】，サブカテゴリーは〔〕，語りの要約は*「斜字」*とする。

１．看護学生が捉えた手術見学実習による術後看護への影響

１）【手術や麻酔による影響を念頭に置いた観察とアセスメント】

このカテゴリーは，〔術式や術中操作の特徴を考慮した観察〕〔麻酔や術中体位の影響を踏まえたアセスメント〕の２つのサブカテゴリーが導き出された。

これは，学生が実際に患者とともに手術室に入室して治療場面を見学することで，全身麻酔や術中体位，あるいは術中操作による侵襲が受け持ち患者に及んでいることを踏まえ，異常の発生の予測性をもって観察，アセスメントしたことを示している。

「背部痛があった時とかは，縫合不全のリスクとかを考えたけど，（中略）手術中 “ずっと横になっていたことと か”，いろいろ手術室でみていたがゆえに，患者さんに言えることがあるから，とにかく背中が痛い理由を考えた。（学生Ｅ）」

「麻酔から覚める感覚が，私の感覚からは遅いような気がして，麻酔の影響が術後どのように影響してくるのか考えた。（学生Ｆ）」

２）【術後の混乱を予防し，安心を守るための患者の現状認識促進に向けた働きかけ】

このカテゴリーは，〔急性期の混乱を予防するために，安心感へと繋げるための患者の現状認識を図る働きかけ〕〔患者の状態を考慮した適切な情報提供〕の２つのサブカテゴリーから導き出された。

これは，全身麻酔や手術の影響から患者が混乱する可能性があることを予測したり，術後患者との関わりのなかから患者の置かれている現状に対する患者自身の認識と現実との相違から，術後患者の安全を守るためには患者の現状認識を促進させる必要性を感じ，術後の状態や理解度に合わせた説明や情報提供を行っていることを示している。

「自分の術後の状態を知っておくことが患者さんの術後の安心感にも繋がる。（学生Ｂ）」

「急性期は混乱する時期なので，ドレーンが入ってますよとか，輸液が入ってますよという説明が重要になってくる。（学生Ｅ）」

「患者さん自身が自分のからだがどう変わるかをどのように認識していて，どのように感じているかをちゃんと確認しないといけないと思った。（学生Ｇ）」

３）【実際の手術をみたことで意識した術後疼痛ケア】

このカテゴリーは，〔実際の手術をみたことにより意識した術後疼痛ケアとタイミング〕〔患者が訴える痛みへの共感〕の２つのサブカテゴリーから導き出された。これは，手術見学実習により，患者の体への侵襲の大きさを目の当たりにしたことにより，疼痛が患者に及ぼす影響の大きさを実感し，常に患者の疼痛をアセスメントしながら，疼痛コントロールを図ることや離床のタイミングを考えていたことを示している。患者の痛みに対する共感ができた一方で，共感する気持ちが強すぎることにより，患者にとって必要なケアの促しに対して消極的になったことを認識していることを示している。

「術後１日目の離床の時は，看護師さんは離床を進めるけど患者さんは痛いと思っていて，離床が進まない患者さんの痛みも理解でき，患者さんが動けるタイミングに合わせて離床を促した。患者さんの痛みに共感しすぎて，患者さんの思いによってしまい，学生からは離床が進められなかった。（学生Ｂ）」

「手術室に行く前から，術後の疼痛を本人も気にしていたし，手術室で傷をみた時は，傷が何か所もあるんで，やっぱりケアの時は疼痛をなるべく軽くするよう意識していた。（学生Ｇ）」

４）【患者・家族の頑張りに感化される看護ケアへの責任】

このカテゴリーは，〔患者と行動をともにすることで芽生えた看護ケアへの責任〕〔患者・家族の置かれた状況を判断し，寄り添いながら，不安を取り除くことに力を尽くす〕の２つのサブカテゴリーから導き出された。

これは，学生が実際に患者が手術を受けている場面に立ち会い，患者と同じ手術室という場と時間を共有したことで目の当たりにした患者の全身で手術に臨む姿から心が揺さぶられ，自然に患者や家族の立場で状況を考え，患者や家族にとって必要な関わりや，看護者としてのケアの責任に対する自覚が芽生えたことを示している。

「(術中) 色素とか入れてリンパ節とかみてたんですけど，(術後に) 患者さんが (色素で染まった) 傷をみて，“これががんなのかしら？”と言って，切除した部位を携帯の写メで撮ってらっしゃって，それを学生にみせながら“この青いところががんなのだろうか？”と聞いてきた。“まだこの青いのが残っているんだけど，大丈夫かな？”と聞いてきたので，(医師から患者さんへ) 説明されているのかもしれんけど，術前から“マーキングしていて，術後も青いのが残りますが，がんではないですよ”と詳しく説明する必要があるのではないかと感じた。(学生D)」

「患者さんの家族は手術が終わった後，泣いていた人もいてたので，本人もそうだが，家族は長時間待っている状態なので，家族へのケアも必要だと感じた。(学生E)」

「自分の目で患者さんが頑張っているところをみたので，ちゃんと看護しなければいけないと思った。(学生H)」

V．考察

成人看護学実習において学生が捉えた手術見学実習体験の術後看護への影響として導き出された４つのカテゴリーから，手術見学実習による学習的意義について２つの視点から考察する。

１．術後回復促進のためのケア視点の実践的な理解

受け持ち患者の手術見学実習体験を通して，麻酔の導入，体位固定の場面や術中操作の様子を目の当たりにしたことで学生は，【手術や麻酔による影響を念頭に置いた観察とアセスメント】を意識しており，手術見学をしたことが自身の術後観察やアセスメントの視点となって活かされたと認識していた。身体の一部が切除される手術をみて，「気丈な方だったけど，術後どう思われるだろう」と患者の苦悩を推測し，「急性期は混乱する時期なので，ドレーンや輸液が入っていることの説明が大事」と不安定な心理状態に至る可能性を実感し，【術後の混乱を予防し，安心を守るための患者の現状認識促進

表１　成人看護学実習における学生が捉えた手術見学実習体験の術後看護への影響

カテゴリー	サブカテゴリー	語りの要約
手術や麻酔による影響を念頭に置いた観察とアセスメント	術式や術中操作の特徴を考慮した観察	患者に接するときは，術式や術中操作の特徴を考慮した
		術中看護を実際に学んだことでより術後合併症予防の必要性を意識した
		異常を早期発見するために必要な観察力をもつようにした
	麻酔や術中体位の影響を踏まえたアセスメント	術中体位による影響を踏まえて患者の訴えをアセスメントした
		麻酔による影響を考慮し，アセスメントした
術後の混乱を予防し，安心を守るための患者の現状認識促進に向けた働きかけ	急性期の混乱を予防するために，安心感へと繋げるための患者の現状認識を図る働きかけ	術後の安心感へと繋げるためには，患者に術後の状態を知ってもらうことが大切
		現在挿入されている「落ち着いたら抜けますからね」と声掛けをした
		急性期は混乱する時期なので，ドレーンやラインが挿入されていることを十分に説明しないとドレーンやラインの自己抜去に繋がると感じた
		患者自身の身体の変化に対する認識の確認を心掛けた
	患者の状態を考慮した適切な情報提供	患者の理解度に合わせて，適切な時期に適切な方法で情報や指示を伝えるようにした
		患者が余計な不安を抱かないための情報提供が大切だと感じた
実際の手術をみたことで意識した術後疼痛ケア	実際の手術をみたことにより意識した術後疼痛ケアとタイミング	常に患者の痛みに気を遣いながら患者のタイミングに合わせケアを行うようにした
		手術をみたことで術後疼痛ケアを意識して実践した
	患者が訴える痛みへの共感	患者が訴える痛みに共感できた
		患者の痛みへの共感が強すぎて離床が進められなかった
患者・家族の頑張りに感化される看護ケアへの責任	患者と行動をともにすることで芽生えた看護ケアへの責任	患者と行動をともにし，頑張っている姿をみることで芽生える「ちゃんと看護をしないといけない」という感覚があった
	患者・家族の置かれた状況を判断し，寄り添いながら，不安を取り除くことに力を尽くす	患者の状況を判断し，安心感を得るために寄り添った
		表出しなくても患者が抱く不安を取り除くことに力を尽くすことが大切
		長時間手術を待っている家族へのケアも必要

に向けた働きかけ】をするケアに繋がったと認識していた。大塚ら[1]は，手術見学実習での学生の学びとして手術侵襲による術後合併症の予測と術後看護への気づきがあることを報告しているが，本研究においても学生は，受け持ち患者に手術侵襲が加わる状況を目の当たりにして，術後合併症の予防と早期発見がいかに重要であるのか，その実際を認識していた。そして，この認識を踏まえて，術後合併症の予防と早期発見のために必要な観察を行い，アセスメントするという実践的思考ができており，これこそ臨床実習でしか学べない臨床的文脈のなかでの実践的な理解ができていることだと考える。また，【実際の手術をみたことで意識した術後疼痛ケア】は，手術後イコール疼痛があるという捉え方から，受け持ち患者と同じ環境や時間を共有し，手術操作や手術に伴う一連の流れに身を置くことで，患者の疼痛ケアに共感を伴った理解に至ったことを示しているといえる。この変化は，常に患者を気遣い，患者が訴える疼痛に共感しつつ，患者のタイミングに合わせたケアを実践するというケア姿勢をも刺激し，患者のニードに寄り添った疼痛ケアの実践的理解ができていることだと考える。しかしながらその一方で学生は，手術見学実習を通して，患者の体への侵襲の大きさを直視することで，患者の痛みに共感する気持ちが強くなり，患者にとって必要なケアの促しに対して消極的になっていた自分自身にも気づいていた。共感とは，「相手の感情を分かち合う，あるいはそれを相手に代わって経験する能力（Carper，1978）」[12]である。学生は受け持ち患者の手術見学により直視した身体侵襲の大きさから，患者と痛みを分かち合う経験をすることで，痛みのある時期に患者の苦痛への配慮に対する倫理的な視点も学べていたと推察する。これは，学生が手術見学実習において手術操作や術中管理だけを見学しているのではなく，手術を受けている患者を全人的な視点で捉えているからこそ導き出された結果であると考える。

術後疼痛ケアは，専門的な判断と実践が求められるケアであり，外科系病棟看護師であっても術後疼痛管理においてはさまざまな問題を抱えていることが明らかになっている[13]。ましてや学生にとっての術後疼痛ケアは，専門的な判断への自信なさや実践力不足から難しいケアであると容易に想像できる。しかしながら学生にとって，患者の疼痛に対して共感し，疼痛ケアに対する重要性と困難感を感じながらも，患者の早期回復のために必要なケア実践に向け，日々内省を行うことは，倫理原則にある無害の原則や善行の原則[14]などの患者に対する倫理的要素も含めた学びから自己の成長へと繋がっていると考える。同時に，術後疼痛のある時期から重要となる早期離床の意義と疼痛を考慮した具体的なケア技術を学ぶ機会にもなる。今回の結果をもとに教員は，手術見学実習により学生の術後疼痛に対する共感を肯定すると同時に，患者にとって真の益になるケアが何であるのかの視点から，早期離床のような術後回復のために重要なケアに積極的に取り組めるよう，ケアの意味づけを行う必要性が示唆された。

近年在院日数の短縮化が進み，手術を受ける患者においても前日入院が多い傾向があり，学生の限られた実習時間のなかでは受け持ち患者の術前に関われる時間はほとんどない現状がある。しかしながら，このような現状のなかでの実習であっても学生は，手術見学実習体験により術前看護の内容や実践の在り方について学ぶことができていた点は，手術見学実習が手術見学内容の学習に留まらず，周術期に広がりをもった学びが期待できることを示していると考える。

２．患者の頑張りに感化される看護ケアの責任への刺激

学生は，手術見学実習において患者と行動をともにし，手術を頑張って受ける患者の姿をみることで，「ちゃんと看護をしないといけない」という認識が芽生えていた。これは，手術を受ける患者からの言語的メッセージがなくても，学生は“患者は頑張っている”という知覚を持つことができ，これが「ちゃんと看護しないといけない」という看護ケアに責任を持つ看護師としてのあり様を育む機会になっていることを示している。先行研究において手術見学実習前の学生は，手術を脅威として捉えている傾向がある[15]という報告があり，手術室で侵襲的な治療を受ける姿を目の当たりにすることは，学生にとって衝撃的な体験であることが予想される。しかしその体験は，ケアへの責任という看護専門職としての心構えを形成しつつあることでもあり，【患者・家族の頑張りに感化される看護ケアへの責任】を体験できる手術見学実習は，看護師としての本質的な姿勢を学ぶことができる場であると考える。そして，新ら[16]は臨床看護師が成長に向かう動機づけの構造の１つとして，他者への配慮を心にとめた自己の探究があることを指摘しているが，学生にとっても手術見学実習で体験したケアへの責任を言語化し，内省することを通して自らの看護観やキャリア形成を育む動機づけとなっていくものと考える。

以上のことから，成人看護学実習において，講義だけ

ではイメージ化がしにくい手術室の環境や手術看護を理解するためには，手術見学が不可欠である[6]ことが再確認された。小谷野ら[17]は，自分の力と能力に応じて試行錯誤し，自分で考え，責任を持って行動するための高い道徳性は自主性・自律性を支える要因となると述べているが，今回の知見より学生は，手術見学実習体験によって自身の看護観に影響を与える情動的な刺激を受け，日々観察力や看護実践力を振り返るなかで，自主性や自律性が促進され，患者に対する看護ケアの責任の高まりや患者の術後回復促進に向けたケア実践を通して倫理性を高めているのではないかと推察された。

Ⅵ．研究の限界と今後の課題

本研究は成人看護学実習終了後も次の実習を控えている学生に研究参加の依頼を行ったことから，研究参加者が少なく，データの一般化には限界がある。

今後ますます学生の実習時間や実習内容の制限が大きくなることが予想されるなかで，手術見学というひとつの実習体験から学習を拡大し，意味ある実践的学習に強化していくための教育アプローチについて探求を継続していくことが課題である。

結　　論

成人看護学実習において学生が捉えた手術見学実習体験の術後看護への影響について分析を行った結果，【手術や麻酔による影響を念頭に置いた観察とアセスメント】【術後の混乱を予防し，安心を守るための患者の現状認識促進に向けた働きかけ】【実際の手術をみたことで意識した術後疼痛ケア】【患者・家族の頑張りに感化される看護ケアへの責任】の４つのカテゴリーが導き出された。

学生は，手術室で見学した手術操作や術中看護だけでなく，術後回復促進のためのケア視点を周術期の連続性のなかで捉えて，実際の受け持ち患者に操作された手術と関連づけた理解ができていた。また，治療を受けている患者の姿から看護職としてのケア責任を育む機会を得ていた。これらから，手術見学実習は，周術期看護の実践的な理解を促進すると同時に，看護ケアの責任といった看護専門職としてのケア姿勢を育む学習機会になることが示唆された。

謝　　辞

本研究の実施にあたり面接にご協力頂きました研究協力者の皆様および日々の多忙な臨床において，学生を受け入れ，可能な限り最大限の教育的な関わりをしてくださっている手術室看護師長様や手術室看護師の皆様に深謝申し上げます。

なお本研究は，第24回日本看護学教育学会学術集会で発表したものである。

文　　献

１）大塚知子，牧野夏子，城丸瑞恵，澄川真珠子　他：周術期看護実習における手術見学実習での学生の学び．札幌保健科学雑誌, 7：31-37, 2018
２）中井裕子，笹山万紗代，政時和美，松井聡子：手術見学実習における看護学生の学び．福岡県立大学看護学研究紀要, 17：71-77, 2020
３）堀越政孝，辻村弘美，恩幣宏美，武居明美　他：手術見学実習における学びの内容　術中レポートの分析．群馬保健学紀要, 30：67-75, 2009
４）多田貴志，三ツ井圭子，田中初枝，眞鍋知子：手術見学実習を通して学生が捉えた手術室看護師の役割．了徳寺大学研究紀要, 12：99-103, 2018
５）嶋﨑昌子：手術見学実習における学習内容の分析　見学レポートの記述から．松本短期大学研究紀要, 21：59-67, 2012
６）佐々木祐子，帆苅真由美，小島さやか，小林理恵　他：看護学生の持つ手術室イメージの手術見学前後の変化から考える周術期看護教育．日本手術医学会誌, 40(1)：1-9, 2019
７）奥村美奈子，兼松恵子，北村直子，田中克子　他：手術見学実習を通しての学習の学び．岐阜県立看護大学紀要，3(1)：89-94, 2003
８）板東孝枝，雄西智恵美，今井芳枝，森恵子　他：手術患者を対象とした成人看護学実習における手術室での学生の学習経験．日本看護学教育学会誌, 22(2)：13-25, 2012
９）大滝周，大木友美，萩原綾香：看護学生が手術見学実習を意図的に臨むための教育的試み（第３報）－手術見学実習記録用紙を用いた学習効果－．昭和学士会雑誌, 78(3)：254-263, 2018
10）中垣和子，今井多樹子，永井庸央，小川素子　他：

急性期看護実習における手術室実習の学修内容　テキストマイニングによる課題レポートの内容分析から．人間と科学　県立広島大学保健福祉学部誌, 18(1)：59-68, 2018

11）板東孝枝，雄西智恵美，今井芳枝，山田和代　他：成人看護学実習における「手術見学実習観察項目表」を導入した実習の学習効果の検討．The Journal of Nursing Investigation., 11(1-2)：51-58, 2013

12）Hesook Suzie Kim：看護学における理論思考の本質（上鶴重美監訳）．日本看護協会出版会, 東京, 2003, pp.199

13）山本奈央，遠藤みどり，井川由貴：外科系病棟看護師が捉える術後疼痛管理における問題．日本クリティカルケア看護学会誌, 10(3)：35-44, 2014

14）小松浩子：成人へのアプローチの基本．看護実践における倫理的判断，系統看護学講座　成人看護学総論　成人看護学①，第14版．医学書院, 東京, 2017, pp. 129-131

15）吉井美穂，八塚美樹，安田智美，木本久子　他：周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化．富山医科薬科大学看護学会誌, 5(2)：103-107, 2014

16）新裕紀子，中尾久子，濱田裕子：臨床看護師が成長に向かう動機づけの構造．日本看護科学会誌, 39：29-37, 2019

17）小谷野康子：看護専門職の自律性に関する概念の検討と研究の動向．聖路加看護大学紀要, 26：50-58, 2000

Effects of Observing Surgery during Clinical Adult Nursing Practicum on Postoperative Nursing from the Perspective of Students

Takae Bando[1)], *Chiemi Onishi*[2)], *Yoshie Imai*[1)], *Aki Takahashi*[1)], *and Kazuya Kondo*[1)]

[1)] *Tokushima University Graduate School of Biomedical Sciences, Tokushima, Japan*
[2)] *Konan Women's University, Kobe, Japan*

SUMMARY

Aim：To clarify the effects of observing surgery during clinical adult nursing practicum on postoperative nursing from the perspective of students.

Methods：Semi-structured interviews were conducted with 10 students in their third year at a nursing college. The obtained data were qualitatively and inductively analyzed.

Results：When observing surgery for the patients they were caring for, the students were aware of [the importance of observing and assessment with the influence of surgery and anesthesia taken into account]. Subsequently, they performed [postoperative pain management based on findings from the observation of actual surgical settings], while providing various approaches, including [Approaches to the promotion of patients' awareness of the current situation in order to prevent postoperative confusion and to protect safety]. Through this process, they developed [a sense of responsibility for nursing care inspired by patients・families' coping behaviors].

Discussion：The experience of observing surgery during clinical training was suggested to help students develop practical insights for care to promote postoperative recovery and a sense of responsibility for nursing care inspired by patients・families' coping behaviors.

Key words：adult nursing practicum, nursing student, postoperative nursing, effect